

連載／がん薬物療法専門医講座

症例報告の書き方

全
6
回

—若手腫瘍内科医のための実践ガイド—

本連載「症例報告の書き方」は、若手腫瘍内科医を主な対象に、
症例報告の意義を再確認し、科学的な評価に耐える報告を作成するための
実践的なエッセンスを伝えることを目的とします。

和文・英文を問わず、臨床疑問の発見から構造化された記載、図表・考察の工夫、
多職種連携、さらには症例報告から臨床研究への発展まで、体系的に解説します。

AI活用のヒントや国際的な視点も交え、現場で役立つ「書き方の核心」をわかりやすく紹介します。

執筆予定 内藤立暁（静岡県立静岡がんセンター 呼吸器内科、支持療法センター）
関根郁夫（筑波大学 臨床腫瘍学）
東 光久（大阪南医療センター 総合診療科）

掲載予定 月刊『腫瘍内科』第38巻第1号～第6号（2026年7月号～12月号）

掲載内容

第
1
回

症例報告をなぜ書くのか

掲載号：第38巻第1号（2026年7月号）

コンテンツ

- ・日本の症例報告の始まり：山脇東洋『蔵志』と近代医学
- ・症例報告の意義：なぜ書くのか？
- ・因果関係を示唆する症例報告：中間地点でもありゴールでもある
- ・CAREガイドライン：症例報告の質を担保する13の項目
- ・おわりに：山脇東洋『祭夢覚文』にみる生命への畏敬

AIミニ欄

- ・CARE checklistの項目をAIに整理させる方法

コラム

「1759年『蔵志』の衝撃と「千年の禁忌」

第
2
回

“違和感”が問いを生む—臨床疑問の見つけ方

掲載号：第38巻第2号（2026年8月号）

コンテンツ

- ・稀少性より“臨床的示唆”の価値
- ・“違和感”の拾い方 (clinical sense of incongruity)
- ・CQ (clinical question) の導出法
- ・Notes-to-selfを活用した疑問共有
- ・ICMJ/COPEが症例選択で求める視点

AIミニ欄

- ・“疑問整理プロンプト”
- ・Young doctorsがよくやる“疑問の拡散”をAIで収束させる方法

コラム

「Case rarityとnovelty：国際誌編集者はどこを見ているか」

※編集の都合により内容は変更になる場合があります。

ほか



科学評論社

〒101-8531 東京都千代田区神田司町2-10-15

<https://www.kahyo.com> TEL 03-3252-7741 FAX 03-3252-5952